図説 医学の歴史

坂井建雄(著)

地域医療研究所シニアアドバイザー
北村 聖

過去の延長線上にある現代を理解し，未来を見通す

同級生の坂井建雄教授が 2 年余りの歳月をかけて『図説 医学の歴史』(医学書院)という渾身の一冊を上梓した．坂井氏の本業は解剖学である．学生時代から解剖学教室に入りびたりの生粋の解剖学者である．卒業後，それぞれの道に専念し接点があまりなかったが，再度会合したのが医学史の分野であった．聞くところによると，ヴェサリウスの解剖学から歴史に興味を持ったそうであるが，私が読んだ「魯迅と藤野厳九郎博士の時代の解剖学講義」の研究は秀逸であった．2012 年に坂井博士の編集による『日本医学教育史』(東北大学出版会)が出版されて以来，より親しくさせていただいている．坂井博士は恩師養老孟司先生と同様，博学であると同時に，好奇心に満ちている．自分の知りたいことを調べて書籍化していると感じる．

さて，本書は表題が示している通り写真や図版が多い．特に古典の図版の引用が多いが，驚くなかれ，その多くは坂井博士自身が所有されている書籍からの引用である．2 次文献ではなく，原則原典に当たるという姿勢は全編を貫く理念であり，それが読む者を圧倒する．まさしく「膨大な原典資料の解読による画期的な医学史(本書の帯)」である．また，史跡の写真も坂井博士自らが撮影したものが多く，医学史の現場にも足を運んだことがよくわかる．また，書中に「医学史上の人と場所」というコラムが挿入されており，オアシスのような味わいを出している．内容もさることながら，人選が面白く，医学史上の大家から市中の名医(荻野久作など)までが取り上げられている．

本書は 4 部 26 章からなっており，第 1 部は「古代から近世初期までの医学」，第 2 部は「19 世紀における近代医学への変革」，第 3 部は「20 世紀からの近代医学の発展」，そして，第 4 部は「医史学について」である．特に 2 部以降の近代，現代医学史は，原典を丁寧に読み込み，社会科学・歴史学というより自然科学の手法でその時代の医学を明らかにしていく姿勢が鮮明である．特に第 15 章「明治期の日本の医学」の記述は巻を圧するものである．また，第 4 部は日本医史学会の理事長である著者にしか書けないものであり，第 25 章「医史学の歴史」，第 26 章「現代における医史学の課題」共に，必読に値する．

歴史を学ぶことは，過去を振り返るだけの行為ではなく，過去の延長線上にある現代を理解し，そして未来を見通すことである．その意味において，本書が令和元年 5 月に上梓されたことは意義深い．医学史といえば長く小川鼎三博士の『医学の歴史』(中公新書，1964)であったが，半世紀ぶりに新しい定本ができたことを実感している．

●B5/頁 656/2019 年
定価：本体 5,800 円＋税
[ISBN978-4-260-03436-4]
医学書院 刊

©IGAKU-SHOIN Ltd. 2019

2026/10/08 09:26:02